

# シェイクスピアと異文化コミュニケーション：序説

浜 名 恵 美

## I. 本論の目的

本論の目的は、「英米文化研究と異文化コミュニケーションの接合」という研究計画の一環として、シェイクスピア研究と異文化コミュニケーション研究の接合の意義と可能性について考察することである。なお、異文化コミュニケーション研究の定義等をめぐる問題についてはⅡ.1で論じるが、英米文化研究についてはここで説明しておく。これは、その是非はとにかく、英米の文化(文学、芸術を含む)の研究という一般的な意味と、私の専門領域または学問的な守備可能範囲の関係から英米を主要対象とするカルチュラル・スタディーズという特殊な意味の両方で使用している。カルチュラル・スタディーズは、1950年代末にイギリスで形成され、現代文化のイデオロギー性やヘゲモニーの問題、もろもろの差異とアイデンティティの構成、意味生成と階級やジェンダー、エスニシティをめぐる社会的実践の関係について探求し、70年代以降飛躍的に発展して今日に至っている<sup>1</sup>。

## Ⅱ. シェイクスピアと異文化コミュニケーション

### 1. 異文化コミュニケーション

「異文化コミュニケーション活動自体は、人類が原始的社会集団を形成して他の社会集団と接触をした時に始まり、その後の社会・文化や文明の発展とともに現在にいたるきわめて長い歴史をもっている<sup>2</sup>。」しかし、異文化コミュニケーション (intercultural communication) の体系的な研究の歴史は浅く、第二次大戦後にアメリカで始まり、発展してきた新しい学問分野である。今日ではアメリカを代表として、日本はもとより世界中に多数の学者と研究者がいて多種多様な理論と方法を用いて盛んに研究を行っているが、いまだに発展途上にあり、「異文化コミュニケーションとは何か」という根本的な問いについてすら、唯一の答えはないと言われる。

とはいえ、ここでは主に石井敏他『異文化コミュニケーション・ハンドブック』（有斐閣、1997）と石井敏、久米昭元、遠山淳編著『異文化コミュニケーションの理論：新しいパラダイムを求めて』（有斐閣、2001）を参照して、文化、コミュニケーション、異文化コミュニケーションという基本概念および異文化コミュニケーション研究の目指す方向などを概観する。

周知のように、文化の定義は非常に難しい。学問分野によっても異なるだけでなく、ひとつの学問分野の中でも学者や時代により多種多様であることも少なくない。異文化コミュニケーションで重要な文化の概念に関して、石井敏は次のように述べている。

芸術、科学技術のような高等文化や歌舞伎や能に代表される伝統文化ではなく、一般市民の日常生活様式としての文化である。一般社会の成員が共通にもつ価値観・思考様式や感情傾向等のような内面的な精神活動、言語行動の特徴や身体表現様式、そして衣食住のような物質的生活条件等は、日常生活様式としての文化の代表的なものである<sup>1</sup>。

文化の概念について、久米昭元と遠山淳は次のように述べている。

端的に述べれば、文化とは人間が、ものごとの解釈や行動において拠り所とする「判断基準」であり、それらは個々の状況で暗黙に了解されていることであり、法律のように文章に記されているわけではない。つまり、文化は特定の状況に対して人々がほとんど無意識に使う「暗黙のルール」であり、生活上の諸問題の解決に向かう行動において「司令塔」の役割を果たしている。そのような視点からみれば、人々がコミュニケーション行動に従事するとき、その行動は文化によって大きな影響を受けていることがわかる<sup>1</sup>。

異文化コミュニケーションは人類の始めからあり、日常生活様式としての文化を基盤として高等文化や伝統文化が形成されたはずであるから、高等文化や伝統文化にも異文化コミュニケーションは当然存在する。しかし、異文化コミュニケーション研究では、基本的に「日常生活様式」としての文化や「暗黙のルール」としての文化を重視すると理解しておくべきだろう。文化の定義としてはどちらも決して明確ではないが、作業仮説としては妥当なものであろう。

コミュニケーションの概念についても多様な定義があるが、ここでは「コミュニケーションとは、一定のコンテキストにおいて、メッセージの授受により、人間が相互に影響し合う過程である」としておく<sup>5</sup>。

異文化コミュニケーションの一般的な定義と概念に関して、石井敏は次のように述べている。

異文化コミュニケーションとは、基本的に人類共通の普遍的なコミュニケーションの過程と構成要素で成立するものであり、特別なコミュニケーションを意味するのではない。注意すべき点は、日常生活で多くの人たちが家族や友人と経験するコミュニケーション活動は同文化の者同士によるものであるのに対して、異文化コミュニケーションは異なる文化的背景の人たちによるコミュニケーション活動であるために特別な注意と努力を要するということである。そこで異文化コミュニケーションは、「文化的背景を異にする人たちが、メッセージの授受により、相互に影響し合う過程である」と定義できる<sup>6</sup>。

ここでは異文化の概念がかなり限定的であるように思われる。確かに、特定の文化に属する構成員 A とその家族や友人たちは「同文化の者たち同士」のことが多い。しかし、異文化コミュニケーションとは、いわゆる外国人とのコミュニケーションだけを指すものではない。異文化の要素には、ナショナルリティ、人種、民族だけでなく、性、ジェンダー、セクシュアリティ、階級、地位、職業、年齢、方言、健常者と肢体不自由者の差なども含められるのである。この視点からは、家族や友人でも同文化の者たち同士とは単純には言えない。とはいえ、一般的な定義または作業仮説として、異文化コミュニケーションは「文化的背景を異にする人たちが、メッセージの授受により、相互に影響し合う過程である」と理解しておくことにする。

「異文化コミュニケーションの研究手法と視点に関する留意点」を理解しておくことも重要である。

異文化コミュニケーション研究において独自の研究方法が存在するかどうかは、研究者の間でも現段階では確認されていない。したがって、異文化コミュニケーション研究を一般コミュニケーション研究の延長ないし応用領域として認識することが適切であろう。具体的には、個人内 (intrapersonal-

sonal) 段階, 対人 (interpersonal) 段階, 集団 (group) 段階, 組織 (organizational) 段階, 公共 (public) 段階, そして大衆 (mass) 段階の各段階における人間のコミュニケーションと文化の関係を明らかにすることが、異文化コミュニケーション研究の課題となる<sup>7</sup>。

なお、個人内, 対人, 集団, 組織, 公共, 大衆の各段階に対応するコミュニケーション活動は、主に参加者の数によって分類される。

1. 個人内コミュニケーション：個人の脳の中の情報処理活動。
2. 対人コミュニケーション：1人対1人で展開される。
3. 集団コミュニケーション：3人から15人程度で展開される。
4. 組織コミュニケーション：学校や会社のような組織で展開される。
5. 公的コミュニケーション：演説のように1人の送り手が多数の受け手を相手にする。
6. マス・コミュニケーション：一定の送り手が不特定多数の大衆を相手にする<sup>8</sup>。

異文化コミュニケーションの研究をする場合、実際問題としては、諸段階のコミュニケーションを扱うことになる。

主に参加者の人数による分類だけでなく、コミュニケーションは他にもさまざまな分類がなされている。その中で、ここでは異文化コミュニケーション研究者のウィリアム・B. グディカンスト (William B. Gudykunst) とヤング・ユウン・キム (Young Yun Kim) がしているように、異文化 (intercultural) コミュニケーション研究と交差文化・比較文化 (cross-cultural) コミュニケーション研究を区別する概念上の問題に注目しておきたい。これに関して、石井敏は次のように述べている。

彼らの提言によると、前者は文化的背景の異なる人たちのコミュニケーション活動を直接研究する作業であり、後者はコミュニケーション活動に関する文化的背景を比較・対照的に研究することである。しかし問題は、前者のみが異文化コミュニケーションの研究対象であると主張する彼らの研究上のアイデンティティ確立意識は建設的ではないということである。実際には、異文化コミュニケーション研究を発展させてきた研究成果の多

くが後者の交差文化・比較文化的なものだからである。(中略)異文化研究と交差文化的研究を区別することはきわめて困難であるばかりか建設的な策であるとは思われない。(中略)特に重要な点は、異文化コミュニケーション行動の研究と交差文化的ないし比較文化的研究は相互補完的であり、研究上の対象は両者の中で相互に機能し合っているからである<sup>9</sup>。

一方で異文化コミュニケーション研究と交差文化・比較文化コミュニケーション研究の区別は困難であると述べながら、他方で両者は相互補完的であると述べているということは両者を区別していることになり、係争点の曖昧さは残る。しかし、特に文化研究者の立場からは、両者を区別することは困難であり建設的ではないという批判は正当であると考えられる。

最後に、久米昭元の重要な提言を引用しておきたい。

人類が地球上で抱えている大きな問題の多くは、煎じ詰めると、文化の問題であり、同時に文化的背景を異にする人々間のコミュニケーションの問題に収斂されるのである。(中略)文化とコミュニケーション研究は、ともすると、時代の荒波の中で、政治や経済状況の陰に隠れてしまいがちになる傾向がある。それだけに、人文・社会科学の中で、より深く文化とコミュニケーションを研究し、それぞれ「文化学」「コミュニケーション学」を確立し、そのうえで、「異文化コミュニケーション研究」を進めていく必要があるように思われる。そうすることによって、当研究は、現代社会が抱えている諸問題に対して、有効な提言を出したり、鋭い批評的視点を提供できるようになるのではないだろうか<sup>10</sup>。

知や教育の変革が迫られている現在、文化とコミュニケーションの研究を推進する意義は大きいのである。

## 2. シェイクスピアと異文化コミュニケーションの接合

### 1) 先行研究と現状

シェイクスピアと異文化コミュニケーションを本格的に接合した先行研究は、現時点では実質的にはないに等しい。理由のひとつは、異文化コミュニケーション研究の側に注目すれば、シェイクスピアを含めた文学や演劇ではなく、日常生活様式としての文化と現実に行われているコミュニケーションを主要な

研究対象としているからだろう。シェイクスピア研究の側に注目すれば、シェイクスピアのテキストに関して、登場人物間の「コミュニケーションの問題」というような言葉が使用されることがあるが、ごく一般的な意味で用いられ、現代発展中のコミュニケーション学の理論や方法が意識されているようには見えない。もうひとつの関連した理由は、シェイクスピア研究と異文化コミュニケーションがかけ離れた分野だと理解されているからだろう。前者は近代初期イングランドの劇作家のテキスト研究であり、後者は基本的に現代の実際のコミュニケーションを扱うために、文学と社会科学という異なる分野、虚構と現実という対立する次元のものだと解されやすい。その意味では、シェイクスピア研究の立場から言えば、異文化コミュニケーションに接近するためには、カルチュラル・スタディーズの台頭後のシェイクスピア研究・批評の場を待たねばならなかったとも言える<sup>11</sup>。

シェイクスピアと異文化コミュニケーションを本格的に接合した先行研究は、特に異文化コミュニケーションという用語を題名に含めた書物という形式ではまだ出版されていない。しかし、私見では、Leslie A. Fiedlerの*The Stranger in Shakespeare* (1973) を先駆的業績と見なすことができる<sup>12</sup>。この本は、4章で構成され、『ヘンリー六世：第一部』のジャンヌ・ダルク、『ヴェニスの商人』のシャイロック、『オセロ』の將軍、『テンペスト』のキャリバンに焦点を合わせ、女性、ユダヤ人、黒人またはムア人、原住民または非ヨーロッパ人というヨーロッパの男性優位社会における4つの代表的な他者（さらに魔女、怪物、悪魔、悪漢、道化等の他者）を取り上げ、原型批評、神話批評、精神分析、言語分析等を駆使して、文化的偏見、不安、葛藤を明らかにしようとしている。アメリカとヨーロッパ、白人と黒人、「ユダヤ人にとっての異邦人とユダヤ人」、教養人と野蛮人、男と女、父と娘等の葛藤が分析されている。他者または異文化に関連して、セクシュアリティやコロニアリズムの問題も扱われている。

ここで、異文化コミュニケーション学で用いられる「異者 (stranger)」、「奇異性 (strangeness)」という概念に注目したい。異文化コミュニケーション学では、文化的差異(ジェンダー、人種・民族、階級、年齢等の差異)のある人々を異者と見る傾向がある。「異者」という用語はやや曖昧で、「異邦人」、「侵入者」、「外国人」、「アウトサイダー」、「新入り」、「移民」、さらに「未知な親密でない人」を指すためにも使用される。この多義性にもかかわらず、異者の概念は、新しい社会秩序に直面する個人や集団の社会過程を分析するために、最

も強力な社会学の道具のひとつであり続けている。異者という概念を確立したのは、社会学自体の確立者であるドイツのゲオルク・ジンメル (Georg Simmel, 1858-1918) とされる。彼の提唱した異者の概念は、後に諸学者によって精緻化され決定的と言えるものはないとしても、グディカントとキムによれば、異文化コミュニケーション学において異者という概念はきわめて有効である。というのは、異者とのコミュニケーションという一般的過程として見ると、異文化コミュニケーション学で行う多数の分析に伴う主要な概念的問題のひとつを克服できるからだ。つまり、文化内部間 (intracultural)、異文化間 (intercultural)、異人種間 (interracial)、異民族間 (interethnic) のコミュニケーションという人為的な区別をつけることに伴う問題を克服できるのである。異者を多様な要素を結合する概念として使うことによって、文化内部間、異文化間、異人種間、異民族間のコミュニケーションを、「異者とのコミュニケーション」というひとつの総合的枠組の中で検討できるのである<sup>13</sup>。フィードラーの『シェイクスピアにおける異人』は、体系的ではないが、洞察に富んだ初期の他者表象論として高く評価することができる。しかし、異文化コミュニケーションの研究の観点から言えば、この分野で扱われる重要なトピックが多数入っている点で先駆的と言えるが、肝心の異文化コミュニケーションの分析という視点がない点を限界として指摘しなくてはならない。

なお、シェイクスピアと異文化コミュニケーションの接合に関連した研究が目下進展中の兆しはある。インターネットで「シェイクスピア」と「異文化コミュニケーション」をかけて検索すると、アメリカでは5,910件 (Yahoo! USA, 2002年12月28日現在)、日本では89件 (Yahoo! JAPAN, 2002年12月28日現在) の項目が出てくる。ほとんどは参考にならない情報だが、注目すべきものがないわけではない。例えば、アメリカの大学における異文化コミュニケーション理論研究をとおしてシェイクスピアおよびイングランドの文化様式を考察することを目指した授業科目。ドイツの英語での現代シアターとドラマ協会 (German Society for Contemporary Theatre and Drama in English) の機関紙は2001年に「境界を超えて：新1千年間初頭の異文化ドラマとシアター (Crossing Borders—Intercultural Drama and Theatre at the Turn of the Millennium)」という特集を組み、その中には、「異文化演劇のために：シェイクスピアの『テンペスト』の変奏 (Towards an Intercultural Theatre: Variations on Shakespeare's *The Tempest*)」という論文も収録されている。

## 2) 接合の意義と可能性

シェイクスピア研究と異文化コミュニケーション研究の接合を試みる場合、本論ではシェイクスピア研究にとっての意義をより重視するとはいえず、言うまでもなく、双方にとって意義のあるものでなければならない。

まず、シェイクスピア研究は、異文化コミュニケーションとの接合によって、多くの利益を得ると期待することができる。理論と実践において目覚ましい発展を遂げている異文化コミュニケーションは、シェイクスピアの演劇テキスト分析に新しい方法を提供しうるだけでなく、新しい読みをもたらすだろう。異文化の者たちの間に生じる（ミス）コミュニケーション・誤解・不安・葛藤、言語と非言語のコミュニケーション、ジェンダー・人種・民族・階級・宗教・地位・出身地・方言・職業・年齢等々の差異に影響されたコミュニケーションのあり方やアイデンティティの問題など、シェイクスピアのテキストには異文化コミュニケーションに関連する多数のトピックがある。例えば、ひとつの可能性として、シェイクスピアのテキストに見られるジェンダーを、異文化の一要素として、異文化コミュニケーションの視点から見直すことができると考えられる。従来のジェンダー研究では、ジェンダーに影響されたコミュニケーションやコミュニケーション・スタイルについて十分考察されていないのである。

シェイクスピアのテキストにおける多くの対話は多種多様な異文化コミュニケーションの事例にほかならず、この分野の理論と方法によって、社会的・文化的・心理的に洞察に富んだ新しい読みが生み出される可能性がある。異文化コミュニケーション研究は、特に台詞の多角的な分析に有益なツールを提供する。革新的または転倒的な読みは必ずしも期待できないかもしれないが、従来とは異なる読みや既成の読みをさらに掘り下げたり拡張する読みが生まれる可能性は大きい。今日のシェイクスピア研究と批評で最も影響力のあるニュー・ヒストリシズム、文化唯物論、ポストコロニアル批評が、シェイクスピアのテキスト以外の史料や文献によって、既成の読みに変更を迫り、しばしば政治的な読みを提出する傾向があるとすれば、異文化コミュニケーションは、文化とコミュニケーションについての考察を促すのは当然だが、何よりもまず、シェイクスピア研究者にテキストそのものに改めて向かいあうことを促す。さらに、シェイクスピアのグローバル化の中で、彼の芝居はますます世界中で上演されたり翻訳されたりしているが、テキストを異文化や外国語に移すことによって生じる（時に創造的な）ずれや異なる意味の出現等の問題を考察する時にも、異文化コミュニケーションの知見は有益である。



次に、シェイクスピアのテキストが、異文化コミュニケーションの研究に資することも確実である。これに関して、池田理知子と E. M. クレーマーが主張する（異文化）コミュニケーションとは「地平の融合」だという主張に注目したい。フッサールとガダマーの理論を踏まえて、地平とは、過去の思い出や知識、感情、文化、さまざまな経験によって積み重ねられていくものすべて、つまり人をとりまく脈絡とも呼べるものだと規定してから、『源氏物語』を例として、彼らは次のように述べている。

他者と交わるということは、他の「地平」と交わるということにはほかならない。たとえば、『源氏物語』を読むことは、その本が織りなす地平と交わることである。その本を読むことによってわき起こる感情や行動への影響といったものは、読者1人のものではなく、これまで『源氏物語』に触れてきた人すべてに共通するものかもしれない。『源氏物語』が教えてくれる世界、うんざりしたり興奮を覚えたりといった経験を分かち合うのである。しかし、同時にそれぞれの読者の経験は異なる。『源氏物語』を読むということは、自分だけの経験であり自分の解釈なのである。そして、それは10年前に同じ本を読んだ経験とも異なる。自分のものの見方自体、常に移り変わっているのである。われわれは、みずからの視点から脱却することはできないが、その視点は変化し続ける<sup>14</sup>。

異文化コミュニケーション研究は、基本的に、現代の日常生活の人と人とのメッセージの授受の分析を重視するが、文学作品と読者との交わりもまた終りなきコミュニケーションなのである。この観点から、特に日本人が近代初期英語で書かれたシェイクスピアのテキストを読むことは、非常に異なる地平と交わることになり、異文化コミュニケーション研究に資する。

コミュニケーション研究では、自然な日常会話の分析が重視される。しかし、とりとめのない話（small talk）を含む日常会話の録音・文字化・データ分析は、多大の時間・費用・労力を要する。その点、特に演劇テキストは、人為的なものであるだけに、たいていはより凝縮された会話を扱えるし、すでに文字化されているので扱いやすく、さらにそれが作られた文化の現実の会話のある程度反映していると考えられるために、コミュニケーション研究にとっても有益な材料となる。実例をあげれば、日本の大学で「シェイクスピアから学ぶコミュニケーション」という目的を設定した演習で、学生たちが「シェイクスピア

ア研究、ならびにシェイクスピア作品を活用したリーダー論、「リア株式会社——リア王におけるリーダーシップと問題解決そして組織のあり方」、「ドラマから学ぶリーダーシップ」といった卒業研究に取り組んだ事例が報告されている<sup>15</sup>。

これは、シェイクスピアのテキストを（異文化）コミュニケーション研究のために領有した典型である。ちなみに、こうした研究について、保守的なシェイクスピア学者は、シェイクスピア研究に異文化コミュニケーションの理論と方法を応用しただけで、興味深いとはいえ、テキストの理解が深まったとは思えないと言うはずである。確かに、テキストの理解が深まることにはならないかもしれないが、こうした研究またはシェイクスピアのテキストの活用法を邪道と切り捨てるのは偏狭だろう。実証的研究の意義は認めるが、それだけが正しいとも価値があるとも私個人は考えない。次々に現れる新しい世代の領有によって、シェイクスピアのテキストは、新しい意味または意義を見出され、存続し続ける。新しいアプローチによって、次の世代にシェイクスピアへの関心をひきつぐことも大切であろう。ともあれ、シェイクスピアのテキストが異文化コミュニケーションの考察の意義深い材料になることは明らかである。

しかし、シェイクスピアが異文化コミュニケーションの研究に果たす最も重要な貢献のひとつは、他者（異者）の歴史化の作用だと考えられる。近代初期イングランドで書かれたシェイクスピアのテキストには、多様な他者が表象され、偏見やステレオタイプも繰り返し現われている。他者（異者）はいつの時代にもある文化的常数だが、ユダヤ人に対するヨーロッパ人の偏見が近代初期の主に宗教的理由によるものから現代の主に民族的理由によるものへと変化したように、その対象や受け止め方は変化してきた。すなわち、基本的に現代中心の異文化コミュニケーション研究に歴史的厚みを加えると期待することができるだろう。

最後に、シェイクスピア研究と異文化コミュニケーション研究の接合に乗り越えるべき障害があることを指摘しておく。異文化コミュニケーションは、単純な文化相対主義には慎重ではあっても、原則として文化相対主義に立脚せざるをえない。その実践的目標は、異文化を理解し、誤解や摩擦を削減・解決し、効果的コミュニケーションを達成することである。しばしば女性に対して差別的な世界中の宗教的・伝統的な慣習でさえ、この分野では、第一に理解する——すなわち、差別的制度もまた「異文化」として理解する——ことが肝心なのである。多種多様な差別を是認するわけではないが、正面からの批判は避ける

傾向がある。批判を始めたなら、異文化コミュニケーションを円満に成立させることは困難になるからだ。他方、シェイクスピア研究も文化相対主義を取り入れている。近代初期ヨーロッパの白人男性優位主義、人種差別、コロニアリズムなどが、当時の歴史的特殊性として黙認されることもないわけではないが、現代の文化相対主義に立脚するからこそ、特にカルチュラル・スタディーズのアプローチをとるシェイクスピア研究者からしばしば問題視されるのである。(異文化コミュニケーションの非欧米系研究者の中には、既成の欧米中心主義の理論を公然と批判する人々がいるが、私見では、現実の差別や偏見に対する批判は婉曲的な傾向があると言わざるをえない。)したがって、シェイクスピア研究と異文化コミュニケーションのこのように対照的な姿勢に折り合いをつける論理と方法を見出さねばならないだろう。

### Ⅲ. 結 論

シェイクスピア研究と異文化コミュニケーション研究の接合には、乗り越えねばならない障害があるとしても、豊かな可能性があると言える。両分野の多数の研究者の多様な取り組みにより、この複合研究が本格的に発展することが期待される。

#### 注

1. 木田元他編『コンサイス20世紀思想事典 第2版』(三省堂, 1997) pp.238-39参照.
2. 石井敏, 久米昭元, 遠山淳編著『異文化コミュニケーションの理論：新しいパラダイムを求めて』(有斐閣, 2001) p.10.
3. 石井敏他『異文化コミュニケーション・ハンドブック』(有斐閣, 1997) p.2, 強調著者。
4. 『異文化コミュニケーションの理論：新しいパラダイムを求めて』 pp.111-112.
5. 『異文化コミュニケーション・ハンドブック』 p.3. コミュニケーションという概念の定義, 構成要素, 諸理論等について, 以下も参照。池田理知子, E.M. クレーマー『異文化コミュニケーション・入門』(有斐閣, 2000) 第2章 コミュニケーションと文化, pp.20-41. 池田謙一『社会科学の理論とモデル5：コミュニケーション』(東京大学出版会, 2000) 第1章 社会生活のバックボーンとしてのコミュニケーション, pp.1-25.
6. 『異文化コミュニケーション・ハンドブック』 p.7, 太字著者, 傍点筆者。
7. 『異文化コミュニケーションの理論：新しいパラダイムを求めて』 p.23. なお, 石井敏は異文化コミュニケーション研究の歴史を①第2次大戦後から1950年代までの台頭期,

②1960年代の開始および普及期, ③1970年代の体系化期, ④1980年代から現代にいたる理論構築期の4期に分けて解説している(p. 13)。

さらに、「21世紀における異文化コミュニケーション研究のあり方」について考察し、変革を迫られる3点を指摘している。第1の点は、「人間と人間のコミュニケーションに関するもの」である。「従来の異文化コミュニケーション研究は、国内・国外における旅行者、留学生、国際ビジネス関係者、移民等が経験する異文化接触上の誤解、摩擦と対立、カルチャーショック、偏見と差別等の比較的「軟派な」問題を主な研究対象としてきた。しかし、21世紀における異文化コミュニケーション研究は、人口爆発と食糧不足、自然環境の破壊とエネルギー問題に代表される天然資源の枯渇、各種災害と緊急援助、難民問題、民族紛争やテロリズム、国際ボランティア活動、そして危機管理等に関連する深刻で「硬派な」異文化問題を扱うことになると予想される」(pp. 15-16)。あとの2点は、「人間と超自然的存在物資に関するコミュニケーションの問題」と「人間と自然環境に関するコミュニケーションの問題」である。いずれも変革を求められる重大な問題点だが、これらについては別の機会に考察することにした。本論では、従来の異文化コミュニケーション研究の比較的「軟派な」問題を主に取り上げる。

8. 『異文化コミュニケーション・ハンドブック』p. 5参照。

9. 『異文化コミュニケーションの理論：新しいパラダイムを求めて』pp. 23-24. グディカント(とキム)は、最新書でも、異文化(intercultural)コミュニケーション研究と交差文化・比較文化(cross-cultural)コミュニケーション研究を区別し続けている。William B. Gudykunst and Bella Mody, eds., *Handbook of International and Intercultural Communication* (2<sup>nd</sup> ed.; Thousand Oaks, CA.: Sage, 2002)参照。この浩瀚な書物は、第1部交差文化・比較文化コミュニケーション、第2部異文化コミュニケーション、第3部国際コミュニケーション、第4部開発コミュニケーションの4部で構成され、29篇の論文を収録している。前置きでグディカント(とモーディ)は、「交差文化・比較文化コミュニケーションの理解は、異文化コミュニケーションの理解に必須である」(ix)であると自説を強調しながら、本論の第1章のコミュニケーション研究の歴史(著者はEverett M. RogersとWilliam B. Hart)では、異文化、国際、開発コミュニケーションという3部門のみが論じられている。続いて、グディカントが主要編集者を務める第1部と第2部では、どの論文を収録するか、どのトピックを選択するか苦心惨憺しながら、交差文化・比較文化コミュニケーションと異文化コミュニケーションの区別を維持しようとしている。両者の区別は全く根拠のないものではないのだが、厳密に維持するのは非現実的であるし、生産的でもないだろう。

10. 『異文化コミュニケーションの理論：新しいパラダイムを求めて』pp. 36-37.

11. 荒井良雄, 大場健治, 川崎淳之助編集主幹『シェイクスピア大事典』(東京図書センター, 2002), 浜名恵美共編著 VⅡ 批評と研究, pp. 494-95参照。

12. Leslie A. Fiedler, *The Stranger in Shakespeare* (1973; St Albans, Herts: Granada, 1974). なお、この時代を先取りした書物は初版から約30年後に邦訳が出た。レスリー・フィードラー著、川地美子訳「シェイクスピアにおける異人」(みすず書房, 2002)。
13. William B. Gudykunst and Young Yun Kim, *Communicating With Strangers: An Approach to Intercultural Communication* (4th ed.; Boston: McGraw-Hill, 2002), pp. 22-25参照。
14. 池田, クレーマー『異文化コミュニケーション・入門』pp.37-38.
15. 産能大学, インターネット検索, 2002年12月10日現在。